

Course number		U-LAS02 10017 LJ36					
Course title (and course title in English)		ドイツ文学 German literature		Instructor's name, job title, and department of affiliation		Graduate School of Letters Professor, KAWASHIMA TAKASHI	
Group		Humanities and Social Sciences		Field(Classification)		Arts, Literature and Linguistics(Foundations)	
Language of instruction		Japanese		Old group		Group A	
				Number of credits		2	
Number of weekly time blocks		1		Class style		Lecture (Face-to-face course)	
				Year/semesters		2025・First semester	
Days and periods		Mon.5		Target year		All students	
				Eligible students		For all majors	
[Overview and purpose of the course]							
<p>前近代の文学に動物が登場するとき、それは基本的に 人間のメタファーとして何らかの寓意を表現するか、 象徴的な意味合いを帯びたモチーフとして働くかのいずれかであり、現実の動物そのものに関心が向くことは稀だった。しかし近代に入り、特に19世紀以降は、リアルな動物が描かれることが増えていく。この動きは、自然科学が発達するとともに、家畜としての動物や狩猟の対象になる動物の苦痛が問題化され、いわゆる「動物の権利」が唱えられ、動物愛護運動や菜食主義運動が盛んになっていく過程と連動していた。そこでは、「他者」としての動物の視点から人間の存在を相対化し、批判的に捉える人間中心主義批判の文学が数多く生み出された。この授業では、以上のような流れの中で具体的にどのような動物がドイツ文学に描かれてきたかを見ていく。</p>							
[Course objectives]							
1．ドイツ文学史について基本的な知識を得る 2．ドイツ文学に描かれる「動物」の特徴と、その文化的文脈を把握できるようになる							
[Course schedule and contents)]							
第1回 イントロダクション 聖書や古代寓話の中の動物 第2回 物語詩『レインケ狐』 中世と近代の境界線 第3回 ゲーテ『ライネケ狐』 寓話の近代化 第4回 グリム童話に描かれた動物たち 民俗学的イメージと個人の創作 第5回 ホフマン『とある教養ある若者の消息』 人間と猿の境界線 第6回 シュピーリ『ハイジ』 家畜とペットの境界線 第7回 エッセンバッハ『クランパンブリ』 リアリズム文学に描かれた「犬」 第8回 リルケ『マルテの手記』 モダニズム文学に描かれた「犬」 第9回 ボンゼルス『みつばちマーヤの冒険』 寓話と自然科学 第10回 カフカ『田舎医者』 超現実的な「馬」 第11回 カフカ『あるアカデミーへの報告』 人間と猿の境界線 第12回 リルケ『ドゥイノ悲歌』 「他者」としての動物 第13回 ザルテン『バンビ』 「他者」としての動物 第14回 ケストナー『動物会議』 社会批判と動物 第15回 フィードバック							
<div style="text-align: right;">Continue to ドイツ文学(2)</div>							

ドイツ文学(2)

[Course requirements]

None

[Evaluation methods and policy]

授業中の小課題にもとづく平常点（50％）および期末レポート（50％）で評価する。

[Textbooks]

Not used

[References, etc.]

（References, etc.）

Introduced during class

[Study outside of class (preparation and review)]

授業で扱う / 扱った作品を可能なかぎり実際に手に取って読んでみてほしい。

[Other information (office hours, etc.)]

kawashima.takashi.7v@kyoto-u.ac.jp